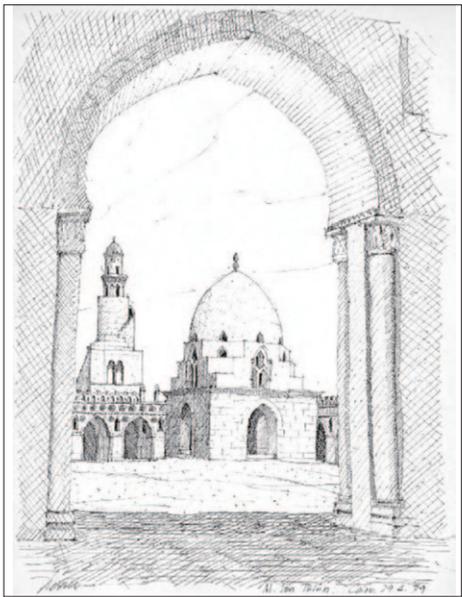


—第7編— カイロ、カオスと祈りの果てに

エジプト、カイロにあるイブンツルーンとブルーモスク^{*1}。長い長い時を経て、今なお祈りを捧げる代表的なモスクとして人々を惹きつける。そして、心は、精神は物理的空間の持続可能性を凌駕する。

もちろん東西南北ここに限ったことではない。ただ、カイロという巨大なカオス都市に体の芯から疲れた後に身を置くと、これらの空間は格別である。中庭と回廊の原型となった前者と、かつては青いタイルで覆われていた後者のその頃を想起するとき、建築の持つ持続的な力を思わずにはいられない。

禁酒の国、サウジアラビアで仕事をしていた我々にとって、ビールが飲めるエジプトは天国であった。その勢いで歩き回り、至る所



図版07-1 イブンツルーン・モスクの回廊と中庭

*1
Ibn Tulun Mosque: エジプト最古で世界最大規模のモスク。Amed Ibn Tulunが876年に建立した

*2
Blue Mosque: Aqsunqur Mosque が正式名、1347年建立

*3
Cairo, エジプトの首都(都市圏人口約1600万人)

にミナレット(尖塔)を誇るモスクのなかから偶然見つけた由緒ある代表的な寺院建築である。ともに巨大な空間を内包するが、人々の心を引き受ける温かい威厳に満ちていた。ともに共通する中庭と列柱と尖塔アーチで囲まれた回廊の原型は、その後他の宗教建築や住宅・建築に引き継がれ、喧噪の外部から隔絶された静寂な半内部空間の原型として世界各地に伝播していったのである。

晴れた日の昼下がり、青いタイルの破片がころうじて残る内部空間に列柱の影が落ちる。たった一人で畳二畳分ほどの絨毯を広げ、坐位でひたすら祈りを捧げ、沈黙を考する男。

そこに充滿していた空気は、ある種の近寄りたさと同時に、どこかで共有しているかもしれない煩惱を介して、とても温かい親密さに溢れていた。無宗教と自認していた自分だが、心のどこかで祈ることへの憧憬のようなものを感じたのである。

後に暗殺されるサダト政権下の時代だったが、ムバラクが追放された「アラブの春」以降、カオスが増幅するカイロの状況からは疎遠になった私の脳裏に、この体験はいまだに深く刻まれている。



図版07-2 ブルーモスクの回廊にて

*4
Amr al Sadi (1918~1981) 初代エジプト大統領

*5
Husni Mubarak エジプト・アラブ共和国大統領